

【実践報告】

子どもと自然・命のつながりを知る 保育実践のあり方を探る - 9 -

——経験の繰り返しによる学びの深まり——

大仲美智子*・笹井 邦恵*・尾尻 民*
合尾ひとみ*・銀山みゆき*・井上美智子**

キーワード：環境教育 自然 保育

1. はじめに

本園では、幼児期の環境教育の観点から、身近に自然を感じ「自然が大好き、大切にしたい」と思える子どもを育てるための保育環境や活動のあり方を探ることを目的に、2010年度から実践研究を始めた。まず、初年度は5歳児のみを対象に実践研究を開始し、2011年度以降はその取り組みを0歳児から5歳児まで拡げ、2012年度は「保育者集団のレベルアップ」を目的に研究推進委員を選出し、菜園係が自然環境を豊かにするように取り組み、保育者主体で実践研究が進められるよう工夫した^{1)~3)}。2013~14年度は、研究推進委員と菜園係の他にエコ係、絵本係、ポスター係、保育課程係、保護者PR係を新たに作って全保育者が役割を担うようにした^{4),5)}。2015年度には新制度の下、保育所から幼保連携型認定こども園に移行し、環境教育についても小学校の各教科で学ぶ環境教育をより一層意識して取り組むことにし、2016~17年度は園庭にビオトープを造成し、「ビオトープでの子どもの遊び方」「保育者のビオトープでの子どもへの関わり方」「ビオトープの管理方法」「ビオトープを園生活の一部にするにはどのようにすればよいか」「ビオトープの四季をどのように感じるか」「保護者や地域の方が環境教育により一層関心を持つ方法は」などをビオトープ施工管理の専門家から定期的に学ぶことで実践研究を深めてきた^{6)~8)}。

2018年度も保護者や地域と連携を深めるためのビオトープ維持管理や園庭の環境改善に参画していただく「緑育の会」、そして、月に一度のビオトープ施工管理士による少人数勉強会や実践事例についての研究会を継続して行った。その過程で子どもと自然との関わりは深まっ

*登美丘西こども園（大阪府堺市）

**大阪大谷大学教育学部

ている印象があり、本稿では環境教育の観点から自然との関わりに焦点を当てて報告する。

2. 実践方法

本園の実践研究では幼保連携型認定こども園教育・保育要領に基づき、子どもの「主体性」と合わせて、環境教育の観点から「五感」と「つながり」を保育者が意識することを重視している^{9)~11)}。本年度も各保育者が保育の中で目を留めた事例を提出し、それらについて毎月研究会を行い、討議することを継続した。「子どもが自ら考え、切り拓く力を育てる」ことを目標とし、経験の数・種類を増やすのではなく、一つの経験の内容を豊かにすること、そして、子ども自身の考える力や答えを見つける力を育てるためにどうしたらよいか考えることに留意しながら実践を継続している。具体的には、言葉で表現できない0・1歳の子どもの場合には、理解できないと思わず保育者が「感じたこと」「考えたこと」「伝えたいこと」を言葉や身振りで伝え、また、「何だと思う?」「どんな匂い?」「触ってみる?」など子どもの意志や考えを尋ねるようにし、子どもの表情やしぐさから思いを読み取って保育者が言葉で共感したり、対応したりした。また、2歳から5歳の言葉で表現できる子どもに対しては、「調べてみようか?」「どうしたらいい?」「なぜ、そう思う?」など、保育者が答えを与えるのではなく、子ども自ら考えるよう促す働きかけを意識した。さらに、子どもは多様な家庭環境の中で過ごしているため、一人一人の自然に対する気持ちや環境への関心度を見ながら関わるようにした。

保育者は昨年度同様、稲作係、エコ・マネジメント係、園庭係、カリキュラム・マネジメント係、玄関ホール係、菜園係のいずれかの係を担当して活動を継続し、保育環境や教育保育課程の改善に努めた。すべての係が絵本やポスターを活用し、保護者や地域への発信を意識することを前提に、全保育者が毎月、自らの保育の中から抽出した事例について研究会で討議すると共に、係活動を報告して、全員がそれぞれの動きを確認できるようにした。本稿では2018年4月から11月までに取り上げた事例の内、環境教育の観点から子どもの育ちが読み取れると思われるものを抽出して考察すると共に、各係活動の成果をまとめて報告する。

3. 子どもの活動

3.1 5歳児

〈バッタとキリギリスの違い〉

8月も下旬になると朝夕に少し涼しさを感じ始めたが、まだまだ日中は暑い日が続いていた。ビオトープでみる小動物は季節を通して変化するが、中でも子どもたちはバッタやキリギ

リスが好きである。園庭ビオトープで年々増え、今年も夏から多くのバッタやキリギリスがみられるようになった。毎日園庭に出ると子どもたちのバッタ捕獲作戦が始まるようになっていた。

8月20日の「からふるデー」（午前中の2時間、子どもが自分で選んだ遊びを屋外でも屋内でもできる日）で、5歳児の子どもたち数名が朝からビオトープの周りに集まり、頭を寄せ合って何かを相談していた。その後、子どもたちはそれぞれ手に透明ケースを持って散らばると、一斉に捕獲作戦が始まった。一人は池の奥に生えているミクリのあたりで見つけたバッタを捕ろうとするが手が届かず、友だちを呼び片手を持ってもらって、もう一方の手を伸ばしたが、結局逃げられ、自分は池にはまってしまった。また、別の子どもは草むらをかき分け、雑草を踏みつけながらようやく捕まえたが、「僕が先に見つけたんやで！」と他の子どもと口論が始まってしまった。それでも、言い合いが終わると落ち着きを取り戻し、次のバッタを探しに行った。数匹捕って満足した後は捕ったキリギリスやバッタの比べ合いや生態観察が始まった。会話を聞いていると「これはバッタや、これはキリギリスや」と見分けている。一見、同じように見える昆虫なので「どうやって見分けるの？」と質問したところ、「キリギリスは触覚が長くてバッタは短いねん」「キリギリスの方が足が長い」「キリギリスは足が長いからよく飛ぶねん」と教えてくれた。その後は、自分たちも今まで気づいていなかった違いを探し始めた。まず、バッタとキリギリスを数匹飼育ケースに入れ、「どっちが登る力があるのか」を比べ、「あっ、バッタの方が足短いから上まで登ってきた」と言いながら観察した。また、「バッタとキリギリスは泳げるのか」という疑問をもった子どもは、池に順番に浮かべてみたが、沈みそうになったので、あわてて救い上げていた。



8月28日には、今まで見たこともないピンクに変色したクビキリギリスを見つけた。「なんでピンクなんや」「わかれへん」「なんで？」という声のとびかったが、答えはわからなかった。宝物でも見つけたようにみんなが集まってきたが、その中の一人が触っているうちにかまれ、「痛い、かまれた」という声が聞こえてきた。別の子どももかまれたが、それでも触ることを止めるのではなく、一人の子どもが何回もかまれる失敗を重ねて、自分なりにかまれない方法

を見つけ出した。「クビキリギスは口が赤いし、よくかむで！こうやって持ったらかまれへんねん！」とかまれぬ持ち方を友だち同士で教えあうようになった。そして思い切り遊んだ後は、クビキリギスをまたビオトープの草むらに放していた。ピンクのクビキリギスは数日いたが、その後は見つからなくなった。

=考察=

この事例からいくつかの要因が重なって子どもの自然に関する学びが深まったことがわかる。まず、環境である。園庭にビオトープができて今年で4年目を迎える。池や小川があるのが当然のように、子どもたちは四季を感じ自然を利用した遊びを楽しみ、様々なことに気づいている。5歳児クラスのほとんどの子どもはビオトープが造成された時から在園しており、春夏秋冬の移り変わりを五感で感じながら過ごしてきた。そして、飼育や図鑑では学びきれない実物の生態を見ることで、知らず知らずのうちに興味や関心を持ち、自然や小動物との関わり方が身についたと考えられる。

次に、仲間の存在である。現在の5歳児の子どもたちは小動物が大好きだが、すべての子どもが最初から好きなわけではない。1、2年前には全く興味がない子どももいれば、怖くて触れない子どももいた。しかし、5歳児の今は誰もが虫探しに夢中になっている。保育者が虫は怖くないと教えたわけでも興味を持つように強制したわけでもないが、友だちとの関わりの中で、虫の好きな子どもと虫に興味のない子どもと一緒に小動物に出会い触れることで興味を持つようになったと思われる。友だちと協力し合って見つける活動の中でも「自分がたくさん見つけたい。大きいの見つけたい」という競争心もあれば、伝え合いもある。バッタとクビキリギスの違いについても、どこからか知識を得ており、自分が得た知識を実際に見て、触れて確認し、それを友だちと共有する喜びを感じている。また、自分たちだけで相談したり、工夫したりして疑問を解決する力を持っており、子どもたちの会話から子どもなりの思考がうかがえ、保育者は成長を感じ、そばで見守っているだけだった。

そして、実体験の必要性である。捕まえる際も、どうしたらいいか、どのあたりにいるか、つまり、その小動物がいる環境がどのような場所であるかをふまえて捕まえ方を考えているが、そのためには過去の体験が必要である。日々触れたり、比べて遊んだりすることを通して、小動物をつぶしてしまわないように力を入れる加減がわかり、クビキリギスにかまれた後にはかまれぬ持ち方を工夫し、考えるようになった。これらは失敗した経験から学んだのであり、実体験を繰り返すことにより、次第に小動物の扱い方が身についていっている。

また、年齢が低い時には小動物を捕獲することを目的としていた子どもたちだったが、保育者が介入したり教えたりしなくても、小動物を尊重する姿が育ってきていることが読み取れる。子どもは、小動物の扱い方を初めからわかっているわけではない。小動物に興味があるから触り、小動物の生態を理解できていないために弱ってしまうということは実際にある。しか

し、小動物に関心を持ち、探求心を持っている子どもは、体験を積んでいくことで小動物が生きている環境を知り、小動物に共感を持って行動ができるようになるのだろう。その前提として、本園では0歳児からの経験の積み重ねを重視しており、5歳児にもなれば食物連鎖についても理解できている。それは、絵本等からの知識だけではなく、実際にビオトープでも大きい動物が小さい動物を食べる場面を見たりして、実体験をふまえた理解である。また、養豚場や精肉店の見学を通して、自分たち人間も豚の肉を食べていて「命のつながり」の中で生きていることを感じる機会も作っている。そのような体験や日々小動物と触れ合っている経験の積み重ねから、小動物の命を大切にしようとする気持ちが育っていきと考えられる。

3.2 4歳児の活動

〈オオオナモミで遊ぼう〉

9月14日、園庭ビオトープのオオオナモミの茂みを通ると服にくっつくことが面白いのか、「ひっつきむし、ついた〜」とうれしそうにK児とY児、S児が報告しにきた。K児は普段から、自分の服についたオオオナモミを保育者の服にもつけて「くっついてるで〜」と楽しんでた。この日は、自分だけでなく他児の服にもくっつけて楽しむという遊びとなり、その中でY児とS児は「なんでこのひっつきむしトゲトゲなんかな？」とオオオナモミの特徴に興味を持ち始めた。周りで遊んでいる子どもも集まり「このトゲトゲ、なんか先がきゅっとなって曲がってるみたいになってるで！」「ほんまやな！ 指の先が曲がってるみたいになってる！」「この、ぎゅっとなって曲がってるところが、服とかに引っかかってみんなにくっついていくのかな」「絶対そうやわ！ そうそう！」と、なぜ服などについてくるのか友だち同士で話をしてた。オオオナモミの形がわかった様子だったので、服につく意味を知っているのかと思い、保育者は「みんなにくっつくのは何でだろ？ 知ってる？」と質問してみた。「う〜ん、何でやろ」という子もいるが、「先がぎゅっとなって曲がってるから？」とオオオナモミの特徴を話す子どもが多い。そこで、「ぎゅっとなって曲がってるところが服とかにつくのは間違いないよね！」と話しかけた。「オオオナモミって、このトゲトゲ付いてるこの実が種って知ってる？」と尋ねてみると、そこにいた数人の子どもたちは知らないようだった。「じゃあ、この実が種で、落ちたらどうなると思う？」と質問を変えてみると、「土に落ちて、またオオオナモミが出てくる！」と今までの知識の中から答えてくれた。植物は種が落ちると再び芽を出すということは知識として持っているようだった。

9月19日。朝晩が少しずつ涼しくなってきた、昼の暑さもやわらぎ園庭でゆっくりと遊び込むことができるようになってきた。K児は、この日もオオオナモミを拾って触ったり、服にくっつけたりして遊んでいた。遊んでいる時にふと思いついた疑問なのか、片付けの時に「先生〜これ水についたらどうなるのかな？」とオオオナモミの実の一つ持ってきた。保育者



もどうなるのかわからなかったので、「どうなるのかな？ つけてみる？」と提案し、保育室にあった透明の入れ物を K 児に渡した。K 児は入れ物に水とオオオナモミの実を入れてロッカーの上に置いていた。その日の夕方には「これも入れたい」とオオオナモミの葉っぱと思われるものを持ってきた。保育者が「いいよ～」と答え、K 児はすぐに保育室に戻り種の入った入れ物に入れていた。その2日後、入れ物の中を K 児と一緒に観察した。保育者が「どうなってるかな～？」と聞くと「水の色が変わっている！」「茶色になってる！」と発見していた。確かに透明だった水が茶色く濁っていた。K 児は水の中に手を入れて葉っぱを触り、「うわー、ねちよねちよしてる！」とすぐに手を鼻に持っていき、「くっさー！！！」と素直な反応をした。保育者も匂いをかいでみたが、確かに腐敗した

ような匂いがしていた。K 児の大きな声を聞いて同じクラスの子どもが何事かと数名集まってきた。「何がくさいん？」と友だちに聞かれ、「これがくさいねん！ かいでみ？」と K 児が言うと、周りの子どもも匂いをかぎ、「くさい！！」と K 児と同じような反応をした。みんなが匂いをかいでいる中、H 児がオオオナモミの実を持ってきて、K 児に差し出した。水につかったものとそうでないものを比べられるように持ってきてくれたようだった。K 児は二つを触り比べてみて「(水につかった方が)フワフワしている」と言った。十分に観察をして満足した K 児はオオオナモミの実が入っている透明の入れ物を保育者に渡そうとしたので、保育者が「これ、どうする？」と聞くと、K 児は「土のところに流す」と言い、自分でオオオナモミの実と葉っぱの入った水をオオオナモミが茂っている土のところに持って行き、流していた。

10月の下旬、K 児の以前の観察の様子を見ていたのか N 児が「(オオオナモミの実を)水につけたらどうなるんやろう」と同じように持ってきた。今度は透明の瓶の中にオオオナモミの実を三つだけ入れていた。保育室の入り口の柵の上にその瓶を置くと、通る時に目がいくので N 児や一緒にいる友だちもその瓶をのぞいては、水が減っていれば足し、水が濁っていると水を入れ替え観察を続けた。その際にはオオオナモミを触って感触も確認している。やはり、少しフワフワしていて、とげのチクチクした感じもやわらかく感じる。そこで、「ずっと水につけてたらこのオオオナモミどうなるの？」とみんなに聞いてみたところ、「もっとやわらかくなって、ぷにゅぷにゅになるとちがう？」「チクチクのんが抜けて、つるつるになると思うわ！」と友だちと話し合いながら、発言する姿が見られた。「でも、つるつるになったら、トゲトゲがなくなるから服にくっつかへんな～」と発言する子どもがいた。「とげとげな

いとくつつかないかもやね」と保育者が言うと、「くつつかなかったら、ぼとって落ちないから仲間増やされへんようになると思う!」「そうやで、下に落ちないと土の中に入れへんから芽が出てこないで!」と色々気づいたことを発言してくれた。瓶の中のオオオナモミは、N児が観察を続けたいと言っているのものでそのまま保育室の棚の上に置き、観察を続けた。

10月下旬に水につけた実だったが、1月10日によく観察していたH児が「小さな芽が出てる!」と見つけ、近くにいた子どもたちにも伝わった。保育者はそれ以前にその変化に気づいていたが、子どもが自分で見つけるまで待っていたのである。「種、触ってみようか」とO児が瓶の中の実を触って、「前と同じワフワヤな」と感触を言葉にした。この実験を提案したN児も驚いたり喜んだりしていた。その情報はクラス全体に広がったが、「芽がでている」という観察で終わっている。今後子どもからどんな言葉が出てくるのか楽しみである。

=考察=

4歳児クラスの子供たちは園庭に生えている植物で遊んだり、観察したりすることが好きで、色々な発見をする。この事例ではオオオナモミの実が服にくっつき面白いという遊びがきっかけとなり、オオオナモミの観察へと発展していった。まず、毎日のように遊ぶことができることや子どもが思う存分遊ぶのに使えるだけの量が園庭にあったということが、基本として重要である。園庭にある木々の回りの草地には子どもがあちらこちらに運んだオオオナモミが生えるようになり、枯れても抜かず、自由に子どもの遊びに使うことができるようにしている。オオオナモミは子どもの手に扱いやすい大きな実をつけるため、遊びに適している。オオオナモミも単発の触れあいだとくつつくことを楽しんで終わることが多いが、本園では園庭で身近にあり、毎日遊ぶことができる環境があるため、子どもが自ら観察したり、「水につけたらどうなるのか」と疑問が生まれ、実験する段階にまで発展できたと思われる。

観察時には実際に実をよく見て、トゲの先の形状まで確認して服にくっつくことまでできている。今回はオオオナモミが種であることを保育者が説明してしまったが、子どもは種から子孫が育つということは知識として知っていたようであり、最終的には水につけたオオオナモミの実のトゲがやわらかくとなると、くっつきにくくなり、結果として分布を増やすことができないのではないかとことまで推察することができた。その際、子どもは「仲間を増やす」という表現をしているので、植物も種ができ命が繋がっていくことを、今まで持っている知識と経験から知っていると考えられる。実際、9月には種から増えるということに考えが及んでいなかったが、10月には種から仲間が増えるという発言が出て、分布を広げて



増えるという種の役割にまで知識が広がっている。その間、保育者が『たね』や『たねがとぶ』の絵本を保育室で読んだり、秋の遠足に行った堺自然触れあいの森でレンジャーさんに教えてもらって種探しや種飛ばしを経験したりしたこと、それらが知識として残り、それを実際にオオオナモミの種にも適用して推察ができたといえる。絵本や環境教育の専門家から得た知識が、実際の体験の際に役立つということであり、日頃の保育室や行事における経験も一つの役割を果たすということから、指導計画の中の様々な活動を学びの継続や関係性の観点からつなぐ必要性を確認できた。

また、今回の事例からは仲間の存在が学びを深めることに役立つことが読み取れる。Y児とS児は、オオオナモミの特徴をよく見ている、細かい部分にまで目がいき、疑問に思ったことを自分なりに考え、それを説明したが、保育者からの質問に答えながらも、「ああじゃない?」「こうじゃない?」というやり取りをしており、そうした仲間との協同的なやり取りが答えを深めたといえるだろう。また、K児やN児は園庭での遊びの中でオオオナモミの実に興味を持って、よく一緒に遊び込んでおり、園庭でも雨水タンク横の水たまりに実を入れて遊んでいた。そうした経験から、K児の取り組みが始まり、N児の再挑戦につながったと思われる。いずれの場合も、保育室に置き、他の子どもも観察できるようにしたが、自ら取り組み始めたことであり、目の届きやすいところに置いたことから、子どもも単に見るだけでなく、触ったり、匂いをかいだりして変化を確認しながら、観察を継続することができた。

ところで、K児は、水につけて腐敗が始まった葉や実を最終的にはゴミとして扱うようなことはせず、保育者が指示したわけでもないのに、土のところに返すことを提案した。多様な家庭環境の中で過ごす子どもたちで個性は一人一人違うが、0歳児の頃から本園の自然環境の中で様々な体験をしてきているため、自然のものは自然へと還っていくことや植物の種は土のところにありべきであることなど、そうした自然に対する感覚が当たり前のように身についているようだ。こうした感覚は単発的に言葉で教えられて身につくものではなく、日々の生活の中の体験の継続によって身についていくものであろう。

3.3 3歳児の活動

〈きれいな落ち葉見つけたよ〉

9月中旬、園庭で遊んでいると、0歳児から本園に在籍しているH児が黄色に色づいたソメイヨシノの落ち葉を数枚拾って「きれいでしょ」と言わんばかりに自慢げに見せに来た。この時期はまだ緑の葉っぱが多く、黄色く色づいた葉っぱは珍しかったので、保育者が「きれいな葉っぱ見つけたね! どこで見つけたの? これと同じ葉っぱどこにあるのかな?」と聞くと、「先生の分も見つけてきたる!」とその葉っぱを見つけたあたりを探しに行った。しばらくして「あったで!」と言って持ってきたが、「線(葉脈)は一緒やけど、形がちよっと違う

なあ…」とどこかしっくりいかない様子で、また別の場所を探しに行った。今度は見つけた葉っぱと手に持っている葉っぱと見比べ、「これ一緒や！」と納得した様子で見せに来てくれた。そして、「先生も一緒に探そう！」と声をかけられたので、保育者はH児と一緒に葉っぱを探しながら木がある方へ進んで行った。行った先には同じ葉っぱがたくさん落ちている場所があり、その近くにあった木を見上げると、緑色の葉っぱに混じって、H児が拾ってきたものと同じ黄色に色づいた葉っぱが数枚、今にも落ちそうにぶら下がっていた。H児は「この木の葉っぱやったんや」と木の存在を知っていたかのようにつぶやき、再びその木の下に落ちている葉っぱを拾い始めた。保育者が木の枝についている緑の葉っぱを指差して「この緑の葉っぱもだんだん黄色くなるのかなあ？」と言うと、「そうやで！この葉っぱぜーんぶ黄色くなって、ポロって落ちて木だけになるねん。ほんで、ここ（枝の先を指差して）から花が咲くねん」と教えてくれた。そこで、保育者が「どうして葉っぱ全部落ちてしまうのかなあ？」と聞くと、「それは、わかれへん」とのことだった。H児は、木についている葉っぱは取ろうとせず、木の下に落ちている葉っぱだけを拾っていた。その後、拾った落ち葉をマットのところに持っていき「いち、に、さん、し…」と数を数えながら一列に並べ始めた。H児はきれいに並んでいる落ち葉を満足そうに眺めた後、その拾った葉っぱを花束のようにして「この葉っぱプレゼントするねん！」と小さいクラスの子どもや保育者に渡していた。それから1週間ぐらいたった日、H児が遊具の上からソメイヨシノの木を眺めていた。「何をしてるの？」と尋ねると、「葉っぱ、まだ全部ポロって落ちてないなあ〜と思って見ててん」と教えてくれた。遊具で遊びながらも、木にぶら下がっていた葉っぱがあれからどうなったのかを気にしているようだった。

子どもたちが落ち葉に興味を持ち始めた9月27日、お帰りの会の前に『おちば』という絵本を読んだ。その本には、葉の色が変わっていく様子が写真で表されていたり、紅葉のことが書かれたりして、子どもたちも集中して絵本を見ていた。その日の夕方、園庭に出ると今年度から本園に入園してきたT児とN児が絵本の内容を覚えていたのか「先生、見て！さっきの絵本と同じ！」ときれいに色づいた葉っぱを見せに来た。「ほんとだね。この葉っぱどこにあったの？」と尋ねると、「こっち！」と言いながら大型遊具の滑り台のソメイヨシノの木の下まで手を引いていってくれた。そこにはたくさんのきれいに色づいた葉っぱが落ちていた。「ほら見て！これめっちゃきれい。」「こっちも！」と話しながらきれいな葉っぱ探しが始まった。「きれいやね。この葉っぱどこから来たんかな？」と尋ねるとT児が「上！」と木の上の葉を指差した。「あ、上から落ちてきたんやね。」と話をしていると、N児も「上にも黄色い葉っぱがある。」と気がついた。見上げると色が変わった葉がぶら下がっていた。「ほんとや、下に落ちてると一緒やね。」と話すと、T児が「あれももうすぐしたら落ちるねん」というので、「そうなんや。じゃあ、この葉っぱ全部落ちるんかな？」と聞いてみたが、「うーん

…」とわからない様子で走って行った。

=考察=

園庭ビオトープには、クヌギやソメイヨシノ、アキニレなどの木々、小川の周りには色々な種類の雑草が生えていて、花が咲いたり、実ができたり、虫などの小動物がやってきたりして、子どもたちは春夏秋冬の季節の移り変わりを遊びの中で感じていると思われる。また3歳児になり、身近にあるものがすぐに遊びの材料になり、ソメイヨシノの花びらがケーキのトッピングになったり、オシロイバナの色水がぶどうジュースになったり、落ち葉でお寿司を作ったりと自然物を使った見立て遊びが増え、自分たちで工夫して遊ぶ姿が見られ、友だちとの会話や異年齢児との関わりも多く見られるようになった。

事例のH児は0歳児から園に在籍しているため、H児にとっては4回目の秋である。ソメイヨシノが秋に紅葉し、冬には落葉し、春になると花が咲くことをH児が覚えており、実際にその木を見ながら説明できたことから、この木の1年の移り変わりが記憶に残っていて、理解できていることがわかる。領域環境の内容には「季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く」という項目があるが、以前経験した姿と異なる様子に気づくというような変化への単純な気づきとしてとらえられることが多い。しかし、このH児の事例は、季節の変化に応じて植物が季節の循環の中で姿を変えていくことにしっかりと気づいていることを示しており、「変化に気づく」ことを超えて、「変化することを知っている」といえる。0歳児の頃から、毎年のように保育者が「サクラの花が咲いてるよ」「触ってごらん」「いい匂いがするかな?」「葉っぱがいっぱい出てきたね」「葉っぱが飛ばされているね」「つぼみが出てきたね」など、一緒にこの木の前に立ち、変化を見ながら話しかけ、様々な気づきを促してきた。自分で体験したことや保育者から聞いたことを覚えていて、その自然物を使って遊ぶことを積み重ねてきたことが、現在につながっている。乳児期から自然の変化や季節の移り変わりを五感で感じられるよう保育者が繰り返し促してきた結果として、経験に基づいた知識として定着したと考えられる。一方、T児とN児は3歳クラスから入園した子どもたちであり、本園での初めての秋である。絵本で知った紅葉を、園庭で自分たちが経験して知っている紅葉と結びつける力は育っているが、同じソメイヨシノを見てもH児のような知識はまだ持っていないことは確かであり、他の点でも低年齢児から在籍している子どもと比べると自然の移り変わりなどの変化への気づきも少ない印象がある。本園で0歳児からの体験が積み重なっている子どもほど自然に関する知識が豊かであると確認できた。また、子どもの何気ない言葉に気づき、そこに何を読み取ることができるのかを考えるのは保育者である。子どもの毎日の活動をほんやりとただ見守るだけでは、何気ない言葉に気を留めたり、その意味を考えることはできない。H児の育ちは4年の歳月がつながってできているのであり、保育者は子どもの日常の言動を時間という観点からも読み直す必要があるといえる。

環境教育の観点からは循環に気づくことが重要である。ここでは、1年間の循環である。要領等では季節の変化に気づくことは重要とされているが、環境教育としてはそれでは不十分である。単に季節の変化を感性的にとらえるのではなく、変化に応じて動植物がどのように生活しているのかに気づき、自然を守っていくためには生物のそうした時間のかかる循環を守る必要があることを基礎知識として持たねばならない。循環が途切れた時、生物は存在できなくなるからである。この事例では、3歳児が年間を通した循環に気づいている。H児は、乳児期から様々な動植物に触れ季節の移り変わりを感じることでその後の気づきが深まっていると考えられ、在籍が続けばあと2回の循環を本園で経験することになるが、様々な場面での環境教育としての学びと合わせていって学びを深めていけば、今度は小学校以降で学ぶ環境教育のより強固な基盤として働いてくれることにつながるのではないだろうか。

H児は日頃、友だちに意地悪をしまったり小動物を乱暴に扱ったりすることがあり、やや育ちが気になる子どもであった。しかし、この事例では、木についている葉っぱは取ろうとせず、下に落ちている葉っぱしか拾わなかった。その上、葉っぱが自然に落ちていくのをやさしく見守っている姿もあった。植物のような動きのない生物へのふるまいからも、その根底にある感情の育ちが読み取れるのではないか。H児の葉っぱや木に対するやさしい穏やかな心を保育者は感じ、普段の生活の中では素直になれない部分があって、友だちや小動物に対する好ましくない行動に出してしまうのかもしれないと考え直すことができた。保育者がその子どもの言動を丁寧に読み取ろうとすることで、1枚の葉っぱとの関わりからも心の育ちを読み取ることが可能ではないかと考えられる。また、葉っぱでの遊びに過ぎないが、その過程で葉脈や形を比べて同じ落ち葉を探したり、落ち葉を並べたりして数を数えている。3歳頃になると形や数の認識ができるようになるが、こうした自然と関わる遊びの中で数量や自然物の性質についての学びができていることも確認できた。

3.4 2歳児の活動

〈野菜を育てる土〉

0-2歳児だけが在籍する分園は、ビオトープがある本園の園庭とは異なりコンクリート貼りでプランターを並べることでしか自然環境を提供できない環境にあるが、野菜や花を育て、なるべく自然との関わりを身近にできるよう努力している。4月、分園の園庭でプランターにホウレンソウとコマツナの種をまいた。昨年度の2歳児が観察していたコンポスターに堆肥ができていたので持ってくると、進級児のF児が「あっ、コンポスターや」と気づいてくれた。分園のコンポスターは、園のおやつで出されるミカンやリンゴの皮を入れ、発酵させて堆肥を作るバケツサイズの容器である。中身を知っている進級児の中にはその匂いに顔をゆがめる子どももいたが、子どもたちに土と堆肥を混ぜるところから見せると、F児が「くさいなあ。先

生、何で混ぜ混ぜするの？」と聞いてきた。保育者は「くさいけど堆肥にはたっぷり栄養があるから、土と混ぜたらきっとおいしい野菜が育つよ」と伝え、土と堆肥を混ぜるところを子どもたちに見せた。F 児が保育者の言葉を受けて「おいしくなあれ」と呪文のように言うと、他の子どもたちも同じように「おいしくなあれ」と言い始めた。

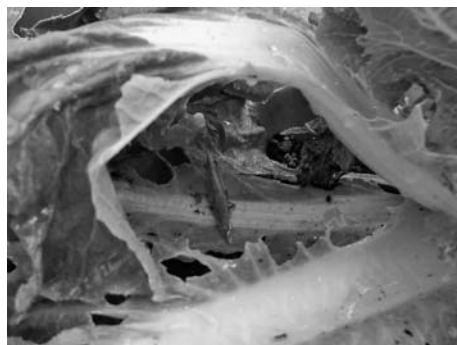


5月にはメロンの苗を植えた。今回は保育者だけでなく、子どもたちと一緒に土と堆肥を混ぜた。順番に混ぜていると、A 児が「先生、ダンゴムシいるよ」と土を指しながら教えてくれた。F 児が「ミミズもいるよ」と言うと、子どもたちは土の中のダンゴムシやミミズを探し始めた。子どもたちから「いっぱい虫おるなあ」という声が聞こえたので、保育者は土の横に置いてある堆肥を指しながら「こっちは、栄養がたっぷりあって、小さな虫（微生物）がたくさんいるんだよ。堆肥と土を混ぜるとミミズが土の中の小さな虫を食べて、ウンチを出してフカフカなよい土ができるんだよ」というと、F 児は「よい土ってどんな土？」と聞いてきた。保育者が「そうだね。野菜がおいしく大きく育つおいしい土かな」と言うと、F 児が「おいしい土か」とつぶやき、子どもたちはミミズやダンゴムシに「おいしい土をありがとう」と言った。メロンは9月には立派な網目まででき、2歳児一人では持てない程の大きさまで生長した。収穫すると、メロンの重さを感じながら、F 児が「おいしい土やから、こんなに大きくなったんやね」と言っていた。

10月には冬野菜のダイコンとハクサイの苗を植えることにした。今回も子どもたちの手で植えるようにした。その際は、F 児が自分から「先生、土にコンポスターの土（堆肥）を混ぜるの？」と質問してきた。「そうよ。コンポスターの土、混ぜるよ」と保育者が答えて、混ぜようとする、新入園児の M 児が「F くん、コンポスターの土にはカブトムシのウンチも入ってるから、土と混ぜるとメロンの時よりもっとおいしい土になるな」と言い、それに答えて F 児は「ほんまやな。ハクサイもダイコンも大きくておいしくできるよなあ」と話していた。カブトムシのウンチとは、子どもたちと飼育しているカブトムシの土を替える時に出るウンチである。コンポスターに入れ、土に還していることを記憶していたようだ。次の日から園庭へ出ると、自分たちで植えた冬野菜の生長を観察したり水をあげたりしていた。

11月、ハクサイの葉が巻きだした頃、友だちと一緒に観察をしていた F 児が「先生、葉っぱに穴が開いてる」と教えてくれた。保育者が「何で穴開いたのかな？」と問いかけると、一緒にいた M 児が「虫さん食べたのかな？」と言い、ハクサイの葉の表や裏を観察し始めた。すると、F 児が「バッタおる」と言い、葉を指した。「F 君よく見つけたね。これはショウリ

「ヨウバツタっていう虫よ」と保育者が言うと、F 児は「バツタさんはハクサイを食べて大きくなっているのかな」と疑問を投げかけてきた。その後 M 児が「そうやで。だっておいしい土で作ったから絶対おいしいって」と会話をしながら、子どもたちは他の野菜も観察し始めた。保育者はショウリヨウバツタがとまっていることに早くから気づいていたが、子どもには黙っ



ておいて様子を見ることにしていたのである。しかし、上のように自分で気づいた子どもたちは、この日から園庭に出るとバツタ探しをするようになった。バツタを見ようとハクサイのプランターに集まり「このバツタは、いつ見ても同じハクサイの上にいるね」「なんでいつもいるのかな?」「ここ、バツタさんのおうちなんかな?」と子どもたちの会話が広がっていった。子どもたちが指でつつくと、違うプランターへ行ってしまったことがあったが、次の日にはまた同じハクサイの上にあった。園庭に出る度にバツタに「おはよう!」と言葉をかけていたが、季節と共にバツタの姿が見られなくなると「どこにいったのかな?」「違うおいしいハクサイのところに行ったのかな?」と寂しそうに探す姿も見られた。

=考察=

今年もコンポスターでの堆肥作りをした。夏の終わり頃から、子どもたちの朝のおやつに出てくるミカンの皮やバナナの皮、カブトムシの糞などを入れて毎朝観察し、日がたつにつれ、発酵が進み、入れたものの形や匂いが徐々に変化し、堆肥に変わっていく様子も見えてきた。1歳からの進級児は、昨年の秋頃からコンポスターで堆肥ができる過程を観察していた経験があったから、中に入っているものがどのような匂いであるのかを既に知っており、それが記憶に残っているのだから、顔をゆがめる反応になったようだ。一方、コンポスターになじみのない新入園児は4月段階では中身を興味深げに覗き込むように見入っていた。この姿から、1歳児の頃の堆肥作りの経験も記憶として残り、顔の表情に出ているのだと確認できた。



春の種蒔きや苗植えの時は、土に堆肥を入れる様子を不思議そうに見ていた新入園児たちだったが、実際に土に触る過程でミミズやダンゴムシが土から出てくることを経験し、また保育者と進級児が土の中にいるミミズやダンゴムシがよい土に変化させていくことを話しているのを何度も聞いていた。土とコンポスターにできた堆肥を混ぜることで植えた種や苗が大きな野

菜やメロンに育つ体験をしたことから、秋に冬野菜の種や苗を植える頃には、普通の土より堆肥が混ざっているよい土の方がおいしいハクサイができるという発言が新入園児からも出て、大きく育ったハクサイを食べた時には「おいしい」という言葉も出た。春から冬までの栽培とコンポスターに関わる経験が繰り返されたために、新入園児もコンポスターでできた堆肥は栄養に富むことを知るようになったと考えられる。これらのことから、2歳児でも土の中の生態系の理解を少しずつだが進めていることがわかる。ミミズやダンゴムシは子どもが園庭で遊んでいてもよく出会う小動物である。しかし、その役割について学ぶ機会を意図的に作らなければ、生態系の学びにはつながらない。それは保育者が絵本などで一方的に教えるというような方法ではなく、この事例のように栽培や堆肥作りという活動の中で出会えたからこそ、分解者の役割についての理解がより深まると考えられる。環境教育において、生態系の理解、特に分解者の存在を知ることは重要である。また、「自分たちが毎日世話をし、生長したハクサイにショウリヨウバツがいる」と「ハクサイに穴が開いている」という観察した二つの事象を結びつけることで、ショウリヨウバツがハクサイの葉を食べていることを推察している。これは「食べる・食べられる」という関係の素朴な理解であり、また、バツの住みかや食べ物などを知ることから親しみを持つことにもつながっている。この事例では、食べ物である野菜を育てるために土の環境を整え、野菜ができる人間や虫が食べ、人間の食べた残り物はコンポスターで堆肥となり、そこではミミズやダンゴムシなどの小動物がそれらを食べることで結果として分解を進めている。そして、食べ物を育てることにその堆肥を使う。この流れは命がつながっていく循環にあたる。実際にはこうした循環は自然界の様々なところに存在するが、栽培を通した循環はこの事例のように身近で経験しやすいものである。2歳児にはまだ深い理解は難しいが、一つ一つの小さな経験が積み重なり、子どもたちの体験を通した知識となつて、次の学年以降の学びにつながっていくだろう。

3.5 1歳児の活動

〈M児の園庭遊び〉

夏、保育者が池の中で泳ぐメダカを見つけたので、何名かの子どもたちの前でメダカを手ですくって見せた。すると「僕も僕も！」と言い、自分もしたいとすくい始めた。M児はメダカにねらいを定めて手を入れようとするが、池にはまりそうになるし、手は届かないし、結果として捕まえられない。靴のつま先部分が池につかってしまい濡れてしまった。そして、そのままどこかに行ってしまったのであきらめたのかと思っただが、何やら長い藁のような草を持って池に戻ってきた。そして、自分がメダカを見つけた場所にその草を垂らした。手でできなかつたのなら、草で釣ろうと考えたようだった。その様子を見ていた他の子どもたちが、同じように葉っぱを取ってきて池に垂らし、魚釣り遊びを楽しんだ。

秋の深まった園庭には、オオオナモミやコセンダングサなどのひつつきむしや他の草もたくさん生えている。10月25日に、子どもたちの洋服にひつつきむしがついていたので保育者は「これ種なんだよ、みんなの服から落ちてそこからまた、♪～芽が出て膨らんで花が咲いて～♪」と歌いながら説明してみた。それを聞いていたM児はピンときたようで、コセンダングサの先にできた種を一人でちぎっては、何かつぶやいている。よく聞いてみると「種、パラパラ～大きくなーれー」と言いながらちぎることを繰り返していた。そして、その場所の種がなくなると、違う場所へと移動し、同じことを繰り返して遊んでいた。それを見ていた他の子が同じように真似をし「種パラパラ～大きくなーれー」とそのあたりに種まきをしていた。



M児は、水辺の様子を見るのが大好きで、玄関で靴を履くとそのまま水辺へ行き、池の中をのぞいたりバッタやチョウを見つけたりしている。また当初はぎこちなく岩場を登ったり小川をまたいだりしていたが、11月頃には余裕でできるようになり、自慢げに「見といてな」と言って保育者に見せてくれた。その様子を見ていたK児がジオトープによく来るようになった。M児は6月生まれ、K児は9月生まれで3か月の月齢差があるが、K児はなぜかM児を慕っており、何でもM児の真似をしようとする。例えば、K児もM児と同じように小川をまたぎたかったが、水にはまりそうな気がするのか怖くて渡れず、最初は保育者と手をつないで恐る恐るまたぐことを繰り返していた。しかし、M児と毎日池の周りで遊ぶうちにK児はM児の動きや足の置き場を見ていて小川を一人でまたげるようになっていった。次に、M児が小川から岩場に遊びを移して行くと、同じようにK児も岩場で遊び始めた。そのうちK児も岩場を一人で登ることができるようになり、「先生、こんなんでできるで～見といてや」という表情で保育者を呼びに来たので、そばで見ていると時間はかかったが恐る恐る岩場を渡って見せてくれた。「すごいね、Kちゃん、そんなことができるようになったの」と言うと、満面の笑みでうれしそうにうなずき、何回も繰り返して見せてくれた。

= 考察 =

0歳児クラスから在籍し環境教育を受けてきた子どもと、4月から新入園として来た子どもとでは、自然に関する興味の持ち方が違う。0歳児の時から繰り返し園庭で遊び、伝えられた



ことは積み重なり、子どもたちの身体能力の発達だけではなく、草花にもやさしく接することや友だちにもやさしくできる気持ちなど情緒面での成長にも影響を与えている。

M 児はおっとりして友だちにもやさしくできる子どもである。そして、自然に関わる遊びや虫探しが大好きで、季節の移り変わりごとに虫探しや植物の収穫など色々な体験をクラスで取り組んできた間にも、自然に高い興味や関心を示してきた。どの学年においてもそうだが、クラスの子ども全員が、M 児のように自然に興味関心を持っているわけではない。しかし、M 児のような子どもが一人でもいれば、クラスに与える影響は大きい。特に1歳から2歳は、友だちを意識し始める年齢でもあり、保育者や仲間の言動を真似ながら、できることやわかることが増えていく。この事例でも保育者が少しだけ投げかけをしたことを力のある M 児が受け止め、M 児のアイデアが他の子どもにも広がり、M 児を真似て K 児がピオトープの地形を自分の身体で理解し、使えるようになった。保育者はすべての子どもにすべての側面が育つことを期待するが、実際には子どもの個性によって興味や関心を持つ対象は異なる。そうした場合、1歳児においても仲間の影響が大きいということは留意すべきであろう。保育者が一方的にすべての子どもに経験の機会を与えるよりも、M 児のような子どもにそれとなく働きかけることで、その子どもが主体的に学び、結果としてその学びが他の子どもに影響していくことの方が保育としてより意義があるかもしれない。M 児自身もメダカを「手ですくう」ということから「草で釣る」ようになったが、草を使つての魚釣りは学年が上の異年齢児や当園を卒園した兄がよくしていた遊びだった。それを見ていて M 児が真似た可能性もあり、クラスの中で他の子どもに影響を与えることが多い M 児だが、その M 児自身も年長児から影響を受けて育っているのである。

また、コセンダングサの種まき遊びの背景には、クラスで行ったハツカダイコンの種まき、その他の野菜や花を育てる経験があるのではないかと考えられる。1歳児であっても経験を積み重ねる中で「種はまくもの」「種から生えるもの」という素朴な知識を持つようになり、その知識を遊びの中で活用できるようになる。環境教育の観点からはメダカの生態の理解（どんなどころに見つけられるか、どうすれば捕まえられるか等）、そして、くつつき虫であるけれ



どもコセンダングサにとっては種は子孫を残すための重要な役割があるものという理解をすることが重要である。体験を通して生態系の中でそれぞれの生物種が異なる暮らし方をしていることを身体で知っていくことは生態系の理解に不可欠である。もちろん1歳児ではそれらの深い理解はできないが、それぞれの季節ならではの自然体験は子どもたちの記憶に残り、また来

年も同じ季節が来ると「あれっ、この匂い、かいだことがあるな〜」「これ前も見たことあるな〜」というように記憶をたどり、思い出すことになるだろう。年齢が進むにつれて、M児は経験を繰り返し、生態系やそこで繰り返られる循環の理解、それらに価値があることなどを学んでいこう。保育者は1歳児なのでわからないだろうととらえず、伝えたいことを繰り返し伝え、同時に、自分で考えてやってみようする力が子どもには備わっていることを常に考え実践するべきであろう。

3.6 0歳児

〈生きもの大好き〉

5月中旬頃、事務室でアゲハチョウの幼虫を飼育ケースに入れて飼っていたものを譲り受け、保育室で飼うことにした。動くものに一番興味を示す時期であることを考え、子どもたちに見えやすいように玩具棚の上に飼育ケースを置いた。クラス全員が興味を示すということはないが、日中や「お帰りの会」の落ち着いた室内で、子どもたちが観察できるように保育者が飼育ケースを手に取り、飼育ケースに入っている枝についた幼虫を見せるとO児（1歳1か月）は「あ！ あ！」と指差しをし、M児（11か月）は「なんだ、これは？」というような表情をして興味を示した。恐る恐る顔を近づけ、怖かったのか体を後ろに引く子どももいて、様々な反応が見られた。0歳児は自分から言葉を発したり理解したりすることは難しいので「これはチョウチョさんの赤ちゃんだよ」「体が黒くてちょっと怖そうだね」と子どもたちに話しかけた。毎日飼育ケースのレモンの葉にいる幼虫の姿を観察していると、レモンの葉がギザギザになっており、葉を食べている幼虫がもぞもぞと動いている。「幼虫さん、葉っぱムシャムシャしてるね」と子どもたちに言うと、子どもたちは不思議そうな顔をしながらも、葉を食べる様子を見ていた。

それから数日後、幼虫は脱皮をして青虫へと変化していた。高月齢児は黒い色をしていた幼虫から緑色の幼虫へと変わった色の変化に気づいたようで、O児は指差しをして「あ！」と声を発し保育者に伝えようとした。そして、5月下旬頃には、よく動いて日がたつにつれて大きくなっていった青虫が、レモンの枝に止まったまま動かなくなった。子どもたちが「何で動かないのかな？」というように枝にいる青虫をじっと観察していたので、「もしかしたら寝ているのかな？」と言葉がけをし、保育者も一緒に観察を続けた。日がたつごとに青虫は緑色から茶色になり、少し触ってみるとプニプニとやわらかい感触から少し硬くなっていて、すっかり



青虫からサナギへと姿を変え、動かなくなった。サナギから何が出てくるのかという期待が膨らみ、子どもたちに「ここに何が入っているのかな?」「何が出てくるか楽しみだね」と話しかけ、毎日観察を続けた。その頃、事務室でアゲハチョウが羽化する瞬間を動画で撮ったと聞き、見せてもらうことにした。動画で羽化する瞬間を見たS児(1歳0か月)は、目を見開き「あー、おおー!」と声を発し、手を合わせてパチパチと拍手をして、まるで「すごーい!!」と感動しているような反応を示した。結局、0歳児のクラスのアゲハチョウは子どもが登園する前に羽化してしまい、その瞬間を見ることはできなかった。しかし、朝、保育室で室内遊びをしている時に飼育ケースの中で羽化したアゲハチョウに保育者が気づいた。そこで、子どもたちと一緒に観るとアゲハチョウは羽を広げて飛び、その姿を見てS児が飼育ケースに顔を近づけて「見て!」というように指差しをして保育者に訴えたり、T児(1歳1ヵ月)が「あぁ!あー!」と喃語を発したりするなど、子どもたちもとても感動している様子が見られた。その日の夕方、飼育ケースからアゲハチョウを放し、空高く飛んでいくアゲハチョウを見えなくなるまでみんなで見送った。

アゲハチョウの観察を通して小動物に興味を示すようになった子どもたちは、8月頃になると室内で飼っているキンギョの「ポンちゃん」にも興味を示すようになってきた。高月齢児だけでなく中月齢児も水槽を泳ぐキンギョを指差しや目で追視し、保育者が子どもたちに「ポンちゃんにご飯あげようか」と言うと、「まんま」と言って近づいてきて、餌を食べる様子を間近で見ていた。この頃になると、入園してから半年がたった低月齢児も徐々に小動物に興味を示し始め、キンギョの動きを見るようになってきた。



=考察=

今年度は高月齢児が多く、全体的に活発で好奇心旺盛である。自然の中にいるアゲハチョウの成長過程を観察するのは難しいが、飼育ケースで育てたことでアゲハチョウの幼虫が成虫になるまでの過程を0歳児の子どもなりに目で見て様々な気づきや発見をして、小動物の色や形、姿を間近に観察することができた。飼育をすることで小動物の存在に気づき、興味を持ち小動物への共感を持つことにつながると考えられる。乳児期の環境教育としてどのような実践が望ましいのか試行錯誤で実践しているが、自然への共感を育てることは可能だろう。まず、同じ生物であるという認識をし、生物として同様の行為をするという認識を経て、自分の存在を中心にして他の生物も自分と同じであることを基本に共感を持っていく。0歳児は野外の動物の観察からそうした経験を積むことは難しい段階であるので、小動物の飼育はそうした経験

をするには適している。小動物も自分と同じように動いたり、食べたり、うんちをしたりすることを毎日身近に観察し、保育者から気づきを促されたり、保育者が愛情を持って接している姿を見て、小動物への共感を育てていくのである。そして、年齢が上がっていき、実際に自分で野外の様々な生物に出会った時に、単に興味を持って捕まえたいと思うだけではなく、生態系の中でのそれぞれの生活への気づきにまで思いを巡らせ、共感することにつながっていただろう。さらに成長するに従い「言葉」を使って自らの感情を表現できるようになると自分たちの身近にいる小動物に対してどういう思いを持っているか、どうしたいのかなど表せるようになるが、その際、保育者の受け止め方や言葉がけが影響すると思われるので、より丁寧に接することが大切であろう。乳児期から子どもは五感を使い様々なことを感じるができるが、表出としてはわかりにくい。子どものわずかな表情の変化等に気づき、気持ちを汲み取り、それを言葉にしていく必要があり、その際、保育者が環境教育を意識して思いを伝えていくことで子どもに何かが育っていくのではないだろうか。

4. 係活動

4.1 稲作係

毎年、5歳児は「稲作」を行っている。大きなプラスチック製の桶を使って米作りをするが、子どもたちは「ぞう組はお米作るんやで！」と進級した時からとても楽しみにしていた。今年度は子どもだけでなく保護者にも興味を持ってもらいながら取り組んでいこうと、一つ一つの活動を絵日記にして保護者に伝えることにした。子どもたちも絵や文章にする過程で、イネの生長をじっくりと見たり触れたりしながら観察するようになり、担当した子どもは友だちや保護者に自分の絵を見せながら説明する姿が見られるようになった。

4月に籾を育苗箱にまき、発芽するまで毎日水やりをした。発芽すると「私の指ぐらい伸びたで！」「大変や！昨日、休みやったから、からからになってる！」と真っ先に苗の観察をしていた。桶に入れる田土は、去年の土を外で干



してから入れることにした。手でほぐしていくと、「あっ！幼虫出てきた！」「ミミズもおるで！」と大興奮し、みんなでバラバラになった田んぼの土を桶に入れた。水を入れてしばらく置き、田植えの準備ができた。

5月になり、苗もしっかりしてきたので菜園に置いた桶に田植えをした。「にゆるにゆるするけど、なんか気持ちいい」と言い、田んぼの土の感触を感じながら、しかし、苗がなかなか立ってくれず苦戦しつつも楽しんでた。植えた後は、順番に回ってくる菜園係の子どもが交替で、毎日菜園にイネと野菜の水の管理に行った。だんだん生長していくと菜園係の子どもが「僕のお腹ぐらいに伸びてるで」「イネの花が咲いてきた」とみんなに報告してくれた。

8月に入って花が咲き、実が付き始めるとスズメに食べられないようにとネットを張ることを子どもたちに提案し、みんなでイネの周囲にネットを張った。「これでスズメが来てもお米が食べられへんで」という子どもがいて、そこから「でも、もしかしたら、この小さな穴から食べるかも…」「そうや！田んぼに立ってるやつ作ったら？」「えっと…あっ！かかし！」という話し合いになり、みんなでかかしを作ることになった。「服と帽子と、あと棒もいるなあ」「かかしの中には何が入ってるのかなあ？」「布が入ってるんちゃう？」と議論していたので、「布もあるけど、こんなのがあるよ」と保育者が藁を持ってくと「これも使おう！」ということになった。子どもたちと保育者で試行錯誤しながら作ったかかしがイネの横に立つと、子どもたちは安心したようにかかしを見つめていた。

10月にはイネの色も変わり、実もしっかりしてきたので、収穫することにした。たくさん



の量ではなかったので順番にハサミで稲刈りをした。しばらくイネの穂を干して、一粒ずつ手で実を取った。その実を瓶に入れて棒で突いて脱穀をしたが、なかなか殻が外れず、交代で突いた。そして、脱穀された米を一粒ずつ取り、玄米になったものをランチの時に白米に混ぜて炊飯し食べることができた。田植え後の毎日の水の管理やイネからの籾取り、脱穀などの地道な作業と春から秋へ季節をまたぐほどのたくさんの時間をかけて米作りをしたことで、食べ物育てる大変さとありがたみを感じることができたようである。そしてご飯を食べる時にいつも言っている「感謝を込めていただきます」という言葉にも重みを感じたようで、ランチのご飯も最後の一粒まできれいに箸でつまんで食べていた。

そして、残った藁を使って、すのこ機で「こも作り」をした。麻ひもで結ぶのが難しかったが、慣れてくると友だちと協力して「次はこっちから通すんやで！」と言いながら楽しんでいった。できあがると、園庭のシマトネリコや菜園のマツに「こもまき」をした。こもまきは日本庭園などで害虫駆除のために行われてきたものだが、その効果はないことも報告されており、本園でも虫が越冬する昆虫ホテルとして実施している¹²⁾。子どもたちも「どんな虫が集まってくるかなあ」と楽しみにしていた。余ったこもを遊具の下に敷いてみると、小さいクラスの子どもたちが裸足になって「おかえりー」とおうちごっこを始めるようになった。さらに、保護者からも藁をたくさんいただいたので、それも一緒にして、三つ編みにしてしめ縄飾りを作ったが、どの子どももうれしそうに保護者に見せて持って帰った。

稲作はたくさんの時間とたくさんの人の手と労力がかかるということを籾から育てる体験を通して気づくことがこの活動のねらいである。環境教育の観点からは、自然の存在が人間の生存の基盤であり、農は人間が生み出した自然と向き合わざるをえない文化であることを幼児期なりに経験することが目的である。こうしたことは現代社会の日常では見えないため、あえて意図的に経験する必要がある。5歳児はこの他にも養豚場や精肉店の見学に行き、稲作と合わせて、私たちの生活が命ある他の生物やそれを食べる姿にしてくれる人たちの存在によって成り立っていることを学んでいる。ごはん粒を一つ一つきれいに取って食べたり「命をもらってるから、大切に食べなあかな」「残さずに食べなあかなで」と言いながら食べるようになり、一層食べ物のありがたみを感じる機会となるようだ。

今年度は、絵日記を描いて掲示することで、子どもたちから保護者に対し稲作の活動を発信することにしたが、実際に足を止めて親子で「稲刈りしたの？」と話をしている様子がみられたり、「瓶と棒で脱穀できるんですね」「お米おいしかったと言ってましたよ」と保護者に声

4月	稲作の準備を始めた。お米の瓶と棒で脱穀をした。お米の瓶と棒で脱穀をした。	10月	稲刈りした。
5月	稲作の準備を始めた。お米の瓶と棒で脱穀をした。お米の瓶と棒で脱穀をした。	11月	稲刈りした。お米の瓶と棒で脱穀をした。
6月	稲作の準備を始めた。お米の瓶と棒で脱穀をした。お米の瓶と棒で脱穀をした。	12月	稲刈りした。お米の瓶と棒で脱穀をした。
7月	稲作の準備を始めた。お米の瓶と棒で脱穀をした。お米の瓶と棒で脱穀をした。	1月	
8月	稲作の準備を始めた。お米の瓶と棒で脱穀をした。お米の瓶と棒で脱穀をした。	2月	
9月	稲作の準備を始めた。お米の瓶と棒で脱穀をした。お米の瓶と棒で脱穀をした。	3月	

をかけられたりすることもあった。今後は、実際に稲作をしている方のお話を聞いたり、昔ながらの米屋で米を精米しているところなどを見学したりするとお効果が期待できる。来年度も継続して活動をし、保護者にも伝えながら、自分たちの生活が自然の恩恵によって成り立っていることへの気づきにつないでいきたい。

4.2 エコ・マネジメント係

今年度のエコ・マネジメント係は、①「環境方針をもとに園運営がなされているかを確認するチェック項目を作れるように準備する」②「環境配慮活動やりサイクルをする」③「環境問題に関する絵本をみんなに紹介する」という3つのテーマのもとで活動した。

①のテーマでは、各係活動で月ごとに実施したことを記録してもらい、それを元に来年度から取り組めるようなチェック項目を作成、準備をした。また、前年度に策定した環境方針にある「保育者の環境配慮活動への関心を高め、保育教諭の持続可能性のための保育の実践力を高めるための研修を継続的に実施する」という項目に従い、毎月の勉強会とは別にエコ・マネジメント係が主体となって内容を検討して園内研修を行った。園内研修の内容は「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」の一つ「自然との関わり・生命尊重」の事例の読み合わせを行い、具体的に10の姿とはどのようなことなのか、保育者側がどのように子どもと関わり援助すればよいかを考える機会を作った。そこで保育者が自然に親しみ、子どもが少しでも自然と関わる中で、感じたり気づいたりしたことを受け止め共感していくことが大切だということ、また、子どもが主体的に自然に触れる経験をする中で「どうなっているんだろう」と好奇心や探求心が生まれるように援助し関わっていくことが大切だということも学んだ。その後、大阪府地球温暖化防止活動推進センターが制作した環境教育に関するDVDを視聴し、春夏秋冬の季節ごとの自然遊びや小動物の役割、地球温暖化の仕組みや影響などを保育者が学ぶ機会とした。

②のテーマでは、昨年から引き続き園全体で行うリサイクル活動をした。「Ⅰ. 水道の蛇口は使ったら閉める、Ⅱ. 人のいない部屋の電気を消す（保育者）、Ⅲ. プラゴミと燃えるゴミはそれぞれのゴミ箱に分けて入れる、Ⅳ. 水やりや遊びには雨水タンクの水を使う、Ⅴ. 牛乳パックはリサイクルボックスに入れに行く」の5つの項目は、昨年から引き続き取り組んでいるため習慣づいているようだ。Ⅳについては、園庭に新しい雨水タンクを設置し、水遊びをする時はタンクの水を使い、水道の水を使わないようにした。雨水タンクは砂場の横に設置し簡



単に蛇口をひねり水が出せるので、子どもたちは水をままと遊びや砂場のお団子作りに使っていた。始めは子どもたちが使用後に蛇口を閉め忘れたことで、雨水がたまっていないことがあった。その度、保育者が「もったいないから蛇口を閉めてね」と伝えることで、次第に自主的に閉めるようになってきた。0歳児でも高月齢児になると、自分で蛇口をひねり水を出してバケツに水を入れては、ジャーっと流してみたり、下にたまった水たまりで遊ぶ姿が見られた。また、蛇口をひねっても水が出ない時には、蛇口の下から覗き込み不思議そうにする姿も見られるようになった。ひねると当たり前に出てくる水が出ないと知った時、2歳児が「先生、水でないよ」と言ったので、「中に入っているのは雨の水で、最近雨が降っていないから出ないんだよ」と伝えると納得している様子だった。5歳児は、雨が降っていないと出ないことがわかっているようで、水が出ないことに対して「最近雨降ってないやん」と友だちとやり取りする姿や、「蛇口、閉めや」と大事に使おうとする姿も見られるようになってきた。雨水タンクを通して、天気のことにも少しでも興味を持ち、雨と遊びに使える水の関係から自然と自分たちの生活のつながりを考えるきっかけとなった。今後は、1回の雨はどれくらいたまるのかを観察していきたい。

③のテーマでは、0～2歳児と3～5歳児に分けて月2冊、環境に関する絵本を係から提案し、各クラスで子どもたちに読み聞かせをしてもらった。絵本を見ていた時の様子や絵本の内容が子どもたちに理解できたのか等、簡単に感想を書いてもらって記録を残すようにした。例えば、どんぐりやとんぼが出てくる絵本では「園庭で見つけると0～1歳児は指差しをして教えてくれることがあった」、セミの写真の紙芝居では「読んでもらった2歳児が羽の使い方を保育者に一生懸命伝えようとする発言が出た」等、絵本を読んだ後に、実際の体験と照らし合わせることができたり、他の生物になりきる様子につながったりする様子が報告された。0～2歳児は季節を感じられる絵本を選び、3～5歳児は環境配慮との関係がわかるシリーズ本を選び、絵本を通して少しでも環境に関心を持てるよう、環境問題にも目を向けられるようにした。『もったいないからはじめよう』のシリーズを読んだ時には、子どもから「ゴミを減らすためには破れたズボンもワッペンをつけてもう1回使ったらいい」「誰もいない部屋の電気を消す」「水道の水はしっかり止める」などの意見が出て身近な環境問題について考える機会になり、園で取り組めることは実践することができた。今後も年齢があがると共に環境のつながりを知っていけるように保育の中で実践していきたい。

4.3 園庭係

園庭係は昨年度に引き続き園庭の整備や自然遊びができる環境を整え、ビオトープ（ここでは小川や池周辺の水辺あたりを指す）の維持管理を考えた。ビオトープが造成されて4年目となり、四季を通じて5歳児を中心に虫探しや虫捕り、メダカの観察、植物の観察や採取など、

自然に触れたり自然物を利用したりして遊ぶ姿が多く見られるようになった。それに加えてビオトープが園庭で活動する時の子どもたちの動線上にあるため、常に子どもたちが行き来する場所となっている。春には希少種であるデンジソウが水辺の周辺に見られるようになっていたが増えてほしい場所には広がらなかった。その理由として、子どもたちが遊ぶ中でデンジソウ



が生長するための土壌を踏み固めてしまっていることが考えられたので、踏み固められた土壌の下からはデンジソウが育たないことを子どもたちにどのように伝えればわかりやすいのかを考え、3歳児から5歳児クラスの子どもに向けて寸劇を行ってみた。その結果、子どもたちが小さなクラスの子どもたちにも言い伝える形で、園全体にデンジソウを大切にしようとする姿が広がり、夏にはたくさんのデンジソウが水辺に見られるようになった。今年度は、保育者が子どもに一方的にルールを伝える形で保全を試みたが、結果として子どもの遊びや子ども自身の気づきを抑制してしまったことがわかった。自然環境の中で自由に遊ぶ子どもたちの姿は理想的だと考えられるが、ビオトープがまだ造成途中であることや本園におけるビオトープが園庭の中にあるという位置関係を考慮すると、ビオトープの維持管理と子どもの活動の両立をどう考えていくのが課題であるとわかってきた。

6月頃、池には多年生植物であるミクリやセリが生い茂り、一時期は池を覆い尽くすほどの勢いで生長した。そこで「ビオトープにやってくる鳥や虫たちが水を飲むことができるように」と子どもたちに伝え、5歳児と保育者が一緒に一部のミクリの葉を取り除き、池の半分が見えるように手入れをした。7月にはメダカ約20匹を放流し、暑さによって小川の水が枯渇しないように水量の維持に努めた。池にメダカが住んでいると認知されたことで、池にやってきてメダカを見る子どもの姿が増えた。

また、今年度は、地球温暖化の影響とも思われる大型台風の多い年となり、本園でも台風の去った後、園庭の木やビオトープの草が風で倒されるという影響を受けた。木や草が倒れていることに気づき、それを立てようとする子どもたちもいたが、低年齢児は倒れた草の上を踏んで歩く子どもが多かったので、できるだけ子どもたちの遊びに制限がかからないように、その際は大人が養生する場所を限定し、園全体に向けて決まった場所の草を保護する意向を伝え協力を依頼した。

秋になりバッタやコオロギ、カマキリなどたくさんの虫が見られるようになると、子どもたちは虫捕りに夢中になった。小動物との関わり方（例えば触れ方や捕まえ方、飼育の方法など）を友だちや大人に教えてもらいながら学び、そして虫そのものを観察して様々なことに自

ら気づき、何か新しいことを発見する喜びを得て充実した時間を過ごしている様子が見られるようになり、ビオトープがあることの意義を再確認できた。

今年度も緑育の会（5月と10月の土曜日に開催）では、在園児や保護者、卒園児や地域の方などの参加を得てビオトープの管理や子どもたちの遊び場作りを行った。5月はビオトープの水際の補修、樹木の定植、出水口付近での石や竹筒を埋め込んだ遊び場作りを行った。10月にはプランターを入れる木枠作りと循環ポンプ付近の整備を行った。緑育の会が行われた週明けに子どもたちが登園すると、園庭の変化に気づき、新しい小山や飛び石、竹筒の水たまりなどを見つけては遊び始めた。子どもたちの好奇心が刺激され、また自然への興味が増すために必要な変化を大人が考え、環境を整えることで、より一層興味関心が広がり、遊びがますます豊かになることが確認できた。今後も係が主となり子どもたちの遊べる園庭の環境を考え整えながら、自然に触れる経験を通して豊かな感情や好奇心、探求心の芽生えなどの様々な成長につなげていきたい。環境教育の観点からはより豊かな生態系ができあがることが目標である。

4.4 カリキュラム・マネジメント係

今年度のカリキュラム・マネジメント係は園長と園長代理、4歳児担任、2歳児担任及び分園リーダーの計5名で担当した。

今年度は3月に保育者の事務量を削減するために購入したソフトに、数ヶ月かけて全員で今までのデータを打ち込んで2018年度のカリキュラムを仕上げ、その確認を含めカリキュラム・マネジメント係が見直しを進めた。打ち込んだものは2017年度版だったが、カリキュラム・マネジメント係は昨年度からの継続担当者



が多かったので、2018年度版の作成及び振り返りをしながら、2019年度版を3月末までに仕上げることにした。

まず、昨年同様、教育保育課程が実情と合っているのか、また各年齢の年間指導計画が実際に実践できているのか、また異なる実践を行っているのかなどを洗い出した。各年齢の担任が自分たちの養護・教育を振り返って修正し、カリキュラム・マネジメント係で最終確認を行った。教育保育課程も年間計画も大きな変更はなかったが、細かな点では実態に合わせて修正した。年齢に沿った保育が展開できているのか、保育者自身が再認識する機会になった。環境教育を実践するにあたって保育の根底にある教育保育課程を見直すことは重要である。カリキュラム・マネジメント係が各クラスに色々な確認をしていくことで、保育者がしっかりと保育に

向き合うことができ、環境教育として本園が大切にしていきたい内容が抜け落ちることなく実践され、よい効果が表れている。次年度から3・4・5歳児クラスは異年齢で過ごす計画であるが、教育保育課程及び年齢別の年間計画を変更する点はないと考えている。だが、実際に異年齢保育を行うと年間計画や行事の取り組み方などに不都合が出る可能性があり、その時はその都度一つずつ検討し、必要に応じて変更したり、新たなものを作成したりしてよりよい教育・保育が展開できるようにしていく予定である。今後もカリキュラム・マネジメント係として保育者が困っていること、実践したいことなどを取り上げて指導計画に反映させ、よりよい保育が展開できるよう努めていきたい。

4.5 玄関ホール係

昨年度に引き続き、本園・分園共に子どもや保護者が必ず通る玄関ホールで環境教育の実践を伝える環境を整えることを目的にして活動した。昨年同様、二十四節気についてわかりやすく書いたポスターを玄関で掲示した。この取り組みの目的は、子どもには自然と向かい合っ



暮らししてきた日本の文化に触れてもらう機会としてとらえる程度でよいが、保育者や保護者が二十四節気という言葉を示されることにより、人の生活が季節の巡り、つまり、自然の1年間の循環の中で成立していることに気づくことである。代表的な立春、夏至、秋分、冬至は名前を聞くと思い浮かぶが、穀雨や白露などがその中にあることを知っている人は少ないのではないだろうか。昨年よりさらに二十四節気について知ってもらうにはどうすればよいかを考え、玄関を入れてすぐの目に入るところにポスターを掲示するように場所を変えた。場所を変更することで目につきやすくなり、子どもたちも登園・降園する際に眺めるようになった。また、子どもたちが興味を持つようにポスターの写真の一部をクイズ形式にし、ペラペラと答えをめくれるようにした。それにより乳児クラスの子もたちも何が書いてあるかわからなくてもめくって写真を見て楽しんでいる姿が見られるようになった。さらに集会や朝の会で「今日は〇〇の日です」と、その日に子どもにもわかりやすく説明するようにした。それにより、二十四節気を十分に理解することはできなくても、今日が暦上ではどういう日かを知ることができるようになった。例えば、「大雪」の日であれば「今日からみんなの周りでも雪が降り始めたり、動物たちが冬ごもりを始めるんだよ。」と伝えたりすることで、子どもたちの印象にも残るようである。家庭で「今日はね、〇〇の日なんだって」と話したと保護者より聞くこともあり、効果があったようだ。また、保育者自身も二十四節気についての知識が少ないと考え、1週間前

からポスターを事務室に掲示したり、年間スケジュールの中に記したりして、理解を深めるようにし、クラスの子どもたちに伝えていくよう依頼した。実際、勤務1年目の保育者の場合は二十四節気というものを知ることから始めなければならなかった。二十四節気について子どもたちにわかりやすく説明できる絵本を探したが、大人向けの本はあっても幼児用は見つからなかった。そこで、子どもにもわかりやすく伝えることができるように季節ごとに紙芝居を作成し、「春」という紙芝居では、春分・清明・穀雨・立夏・小満・芒種の6種類の場面展開にし、それぞれの場面で一番伝えたいことを、絵に表すことにした。

玄関の靴箱の上やカウンターには「季節のテーブル」として、その季節に合わせた花や果物、木の実などを飾った。触れやすい位置にあるため、子どもたちは季節の物を変えるごとに花や果物などに興味を示していた。「これは何?」「どんな匂い?」「触り心地はどうだろう?」など、保育者も子どもたちと話をしながら見て触れることができた。秋には散歩の途中にカキの実を近所の方にいただいたのでそれを飾った。最初は堅い柿であったが、日が経つにつれやわらかくなっていった。子どもたちは毎日観察しているため、「なんか汁みたいなの出てきた!」と変化に気づくことができた。また、普段は近くで見ることができないイガに入ったクリを置いておくと興味一杯で、そっと指で触れていた。絵本で「これはクリでとげがあるよ。中には実が入っていて甘いんだよ」と説明することは簡単だが、実際に触れてみて中を見る実物体験は、より親近感がわき、記憶に残る経験となるだろう。このように季節に合わせてテーブルに飾ることで、その時々旬に触れることができた。

4.6 菜園係

菜園では、旬の野菜の栽培を行い、子どもたちが自分たちで育てている野菜の管理を保育者と共に行ってきたが、今年度は、子どもたちが落ち葉や草、自然で遊ぶ姿を考慮し、菜園が子どもたちの遊びの広がる場としても活用できるように考えた。菜園では野菜の種や苗を植える前に畑の草を抜いたが、菜園全体には雑草や枯れ葉をたくさん残しておき、子どもたちが遊び



の中で活用できるようにした。4, 5歳クラスの子どもたちで菜園にある雑草を選び、種取りをし、その種を「ここに草が生えてほしいからここにまこう。」「同じ草の種やからここにしよう。」など言いながら、園庭にまいた。子どもたちはその後もまいた場所の観察をし、友だちと「種なくなってるわ。」「土の中に入っていて、もうすぐ葉っぱ出てくるかな。」など話し、新しい芽が出てくる期待の気持ちを共有して楽しんでいる。また2~5歳クラスでは菜園の中



の落ち葉やエノコログサ、メヒシバなどを使って遊んだ。保育者が植物を見せて同じものを探して来るというゲームをしてみた。エノコログサのようなわかりやすいものから始め、年齢に合わせて少しずつ難しくしていったことで、子どもたちは菜園を隅々まで探して、生えている植物のことを知るだけでなく、自ら探すことによ

って「ここにはネコジャラシがたくさん生えている」「砂が固いところにはないね」「この草だけ枯れていない」など植物の育つ環境に気づき、それを基に探すようになった。

また、年齢によって異なるが次第に様々な遊びをすることができるようになってきたり、植物探しが日常的な遊びとなってきたりした。1歳児クラスでは保育者が葉っぱに穴をあけて見せると「お顔みたいやな」「葉っぱオバケ」と言ってオバケごっこを楽しんだり、自分で作ろうとしたりする子どももいた。園庭では5歳児を中心に大型遊具の下に落ち葉やススキなどを集めて秘密基地を作って遊ぶようになり、今まであまり植物に興味を示さなかった子どもが、周りで草遊びをする子どもたちに刺激され、興味を示し参加していた。自然への興味があり、自ら植物の観察をし、遊びを生み出して遊べる子どももいるが、すべての子どもがそうではない。興味を持つ子どもから遊びが広がる場面が多いので、今後も、子どもたちが草遊びに興味を持てる仕掛けをし、自然の面白さや楽しさを感じられる菜園作りに取り組んでいきたい。

分園の園庭は本園と比較すると条件が整っていないが、それでも大きな野菜、雑草、花のプランターを分けて並べている。今年も野菜のプランターでは夏野菜や冬野菜を栽培した。例年は野菜の種や苗を植える時にはすぐに植えることができるように事前に保育者が土の準備をしていたが、今年は土の準備から子どもたちとすることにした。園庭にブルーシートを広げ、プランターの土をひっくり返し、子どもたちとスコップを使ってほぐすと、幼虫やミミズが出てきて「あっ！」と子どもたちから声があがった。保育者が幼虫やミミズを掌の上ののせ、子どもたちの目の前まで持っていきと後ずさりする子、指の先でツツンと触れてみる子どもやじっと見入っている子どもなど、様々な姿が見られた。その土に新しい土と園で飼育しているカブトムシの糞、コンポストでできた堆肥を加えた。プランターであっても様々な野菜を継続的に子どもと一緒に育てていくことで、様々な発見があることが確認できた。野菜の水やりをし



ながら生長に気づくだけではなく、キャベツについて青虫を見つけたり、チョウやハチを見つけると保育者や友だちに知らせたり、できた野菜を収穫し、調理場で調理してもらい味わったりする経験もできた。分園でも限られた環境ではあるが、自然を見つけたり、触れたりしながら五感を磨き、自分たちでできることを考えて楽しめる園庭環境を工夫していきたい。

5. 保育者の実践力向上の取り組み

保育者集団のレベル維持のために、全保育者が自らの実践を振り返る例年通りの環境教育チェックリストに加え、今年度は自分自身が気をつけていることなどを記入する欄を追加した自己評価シートに記入してもらった。その結果、自己評価の高かった項目は「保育者の感じたこと、考えたこと、知らせたいことを伝えた」「植物で遊ぶ機会を作った」「常に子どもへ問いかけ、子どもが自分で考えられるようにした」「命あるものへの共感を大切にした」であり、昨年度と類似の項目があがった。一方、自己評価の低かった項目は「子どもが気づきを表現したものを、保育室など継続して確認できる場にした」「自分自身で多様な生物についての知識を増やした」「子どもが何かを発見したり、気づいたりしたら、子ども自身が絵や言葉でそれを表現できる場を作った」であり、昨年とは異なる項目があがった。昨年度あがった項目について保育者の意識が高まり、結果として他の項目に焦点があたるようになったのか、それとも保育者の関心が変わったのか分析が必要であろう。

ビオトープで子どもと関わる時に気をつけていることとしては、乳児クラスでは「子どもが興味を示したことに保育者が気づき、言葉にしたり共感したりする」「子どもたちが何かを発見したら余計なことは言わず、一緒に観察した」というような記述があり、「余計な口出し、手助けをしない。質問があった場合のみ一緒に考え、その際も答えを言わない」「子どもの行動を見守り、つぶやきを聞いたり楽しんだり共感したりする」があがり、いずれも保育者が発信するのではなく、子どもの姿に寄り添う姿勢ができてはじめていることが確認できた。また、環境教育を行っていく中で自分が困った時の対処法としては、「同じクラスの保育者に相談し、わからないことをそのままにしないようにした」「本や専門誌、インターネットなどで調べる」「これであっているかな?と思っても1度試してみる。それでも違ふと感じたら月1回の事例検討会で提案し、他の保育者の意見を参考にしている」という意見が記載された。自己評価の低かった項目に関しては、次回のチェックの際に1段階上げられるように個人の課題とすることにした。

保育者のビオトープに対する意識の向上であるが、今年度は実践研究に初めて取り組む初任保育者が6名いたため、年度始まりの前には去年同様、実践研究についての研修を行った。園庭のビオトープでの子どもたちへの関わり方についても極力見守り、遊びを止めない、保育者

が子どもの疑問にすぐに答えずに思いを聞き取り、共感または答えにつながるような言葉がけをするように全職員に対して伝えた。さらに、ビオトープ施工管理の専門家との月1回の少人数勉強会も引き続き行った。経験の長い保育者が自分自身で疑問に思ったことを指導者に発信する姿が見られ、指導者と保育者の環境教育の取り組み方についての考え方や子どもへの伝え方で相違があると感じた時には意見を伝え、疑問点を解決できるように努力してきた。経験年数の浅い保育者は、なかなか討論に参加できずに聞いていることが多かったので、後半は経験の浅い保育者を中心に勉強会を実施してきた。

6. 次年度への展望

2019年度は乳幼児期の環境教育のあり方を模索し始め10年目となる。実践研究の成果としては、子どもたちの成長、発達に役立つ保育に常に向かっているということである。昨年度後半より「からふるデー」と名付けた保育活動を取り入れた。3・4・5歳児が自分で主体的に活動するように、園内で午前中2時間好きな遊びをするという取り組みである。昨年度は月に1回程度の実施だったが、今年度は毎週実施できるよう努力した。小川に異年齢の子どもたちが集まり、メダカを探し手ですくおうとしたり、オオオナモミの種を服に投げてくっつけたりして遊ぶなど、保育者が何も言わなくても、子どもは自分で遊びを見つけ、考えだし、発展させていく。また、年長児の普段の遊びを年中、年少クラスの子どもたちが真似て遊ぶ姿が見られるようになった。子どもの個性が際立ち、日頃見えない子どもの力が見えて保育者の子どものとらえ方を再考させるきっかけとなっている。室内でも屋外でも危険でない限り遊びを止めない、子どもが自分で考えるように仕掛け、保育者は見守るようにしている。間違えば単なる放任になってしまうので、保育者の実力が問われる保育でもあり、課題としては、そうした子どもの遊びを見届け、子どもの言動に学びを読み取る力を保育者がさらに身につけていく必要があるということである。来年度も続けて保育の質の向上につながるよう継続していく。

保護者には例年通り、ホームページやクラスニュース等を通して園庭ビオトープや菜園での活動を伝えてきた。普段は園になかなか来られないが、久しぶりに保育参観の際に来られた保護者の中には園庭ビオトープを見て「草がよい感じに育ってきましたね」「虫の鳴き声が心地よいね」などの声をかけて下さる方もいる。また、保護者のビオトープに対する意識の向上、そして、保護者や地域との連携のために今年度も2回、保護者が参加する「緑育の会」を行った。1回目の夏には小川の整備、2回目はプランターの木枠制作と垣根の修理を実施し、各回10家庭ほどの参加があった。また「遊びに使って下さい」と農業を営んでいる保護者が自分の田んぼの藁を持ってきてくれたり家の近くの公園で集めたまつぼっくりを持ってきてくれたりして、子どもたちの遊びや活動が広がっている。季節ごとのビオトープの変化に「草が青々

としてきたね」「ひつつき虫がいっぱいなってる」「子どもが水たまりで遊ぶから長靴を園に置いておきたい」などの保護者からの言葉が聞かれ、好意的な感想が増え、本園の保育への理解が深まっている印象がある。環境教育は成果物があるわけではなく地道な保育活動であり、日常生活に入り込んでいるため行事のように目立つことがない。そのため、保護者に園の意図が本当に伝わっているのだろうかとか疑問に思うこともあるが、環境教育の保育に対して苦情はなく、むしろよい保育をしていると励まして下さる方が多い。ビオトープの維持管理や教材の提供など、保護者が参画したことを子どもが喜ぶ姿も確認できており、要領において家庭との連携が重視されているように、本園でもこうした活動を継続することでさらに連携を深めていきたい。

環境教育を継続する際の課題は職員育成である。職員は少数ではあるが毎年入れ替わりがあるため、子どもたちに直接影響を与える保育者の育成が一番大事であると考え、今後も新人だけでなく経験者も研修を続けられる環境を作っていきたい。また、保育者の記載した事例について研究会を毎月継続しているが、記録することで保育者の意識が環境教育とつながっていくため、継続が必要である。各係活動は、担当者が入れ替わる係もあれば、変わらない係もある。どの係も年度初めは活動しなければいけないという義務感で取り組み始めるが、実際の保育で各係の活動に効果があると手応えを感じるようになると、保育者からよいアイデアが生まれ、積極的に動き出すことが毎年確認できている。そして、その結果、園環境が維持されるだけでなく、確実に充実してきている。係活動に取り組むことで保育者には園の保育運営に携わっている自覚が生まれるようである。

ビオトープには初年度に比べれば植物も小動物も増えているが、ビオトープ施工管理の専門家の目からすればまだまだ不十分という判断がなされている。池の水の管理についても今年はコンピューターで水の出る時間を調整できる器具を設置したため、水が極端に減ることがなくなり、水量の心配をしなくてもすむようになったものの、季節やその日の天候によって水量は変化し、良好な水量を維持し続けることは器具だけでは難しいこともわかってきた。そのため水量とビオトープ全体の状態を日課として見守るようになった。日頃自然環境における水の状態変化が様々な要因によって起こされていることなど気づく機会はないが、この水量管理を通してそれに気づかされ、自然の状態を常に意識し、自覚することに結果としてつながっている。環境教育実践のためには、いわゆる整備された公園や園芸種にあふれた庭園ではなく、環境教育で欠かせない「生態系の学び」ができる園庭にする必要があり、自然にある雑木や雑草と呼ばれる植物を増やし、できるだけ自然の中の一部を持ってきたような園庭ビオトープにしたいと取り組み、小面積の園庭であるが少しずつ改造している。これからも育成しながら、子どもたちが自然に直接触れる機会を増やし、生態系の学びにつなげていきたいが、一度破壊された自然が元に戻るのには数十年、数百年かかるとされるようにビオトープ育成も時間がか

かることがようやく園として理解できてきたことから、一層、環境教育の必要性を認識し直す機会ともなっている。

謝辞

本実践研究については（有）エコ・プランニング吉田順子氏から多大なる知識提供及び協力をいただいていることに感謝申し上げます。本研究の一部は、JSPS 科研費（課題番号 15K00668）により実施したものである。

引用参考文献

- 1) 大仲美智子・海老澄代・米谷真夕子・霜野恵・井上美智子：子どもと自然・命のつながりを知る保育実践のあり方を探る - 幼児期の環境教育の観点から -，大阪大谷大学幼児教育実践研究センター紀要，1，pp.36-49, 2011.
- 2) 大仲美智子・海老澄代・井上美智子：子どもと自然・命のつながりを知る保育実践のあり方を探る - 0歳児から5歳児まで，園全体の取り組みへ -，大阪大谷大学幼児教育実践研究センター紀要，2，pp.53-69, 2012.
- 3) 大仲美智子・海老澄代・尾尻民・笹井邦恵・東直実・山口真由美・井上美智子：子どもと自然・命のつながりを知る保育実践のあり方を探る - 3 - ～0歳児から5歳児まで，実践2年目の育ちへ -，大阪大谷大学幼児教育実践研究センター紀要，3，pp.72-98, 2013.
- 4) 大仲美智子・海老澄代・笹井邦恵・尾尻民・玉嶋範子・青山明日香・西山千晶・井上美智子：子どもと自然・命のつながりを知る保育実践のあり方を探る - 4 - ～保育者の意識を高める試みへ -，大阪大谷大学幼児教育実践研究センター紀要，4，pp.98-121, 2014.
- 5) 大仲美智子・笹井邦恵・玉嶋範子・矢越里花・田中英里・安食絵美・丸谷菜摘・井上美智子：子どもと自然・命のつながりを知る保育実践のあり方を探る - 5 - ～保育士の主体的な取り組みの発展へ -，大阪大谷大学幼児教育実践研究センター紀要，5，pp.41-59, 2015.
- 6) 大仲美智子・笹井邦恵・尾尻民・福馬千裕・田中絢子・合尾ひとみ・井上美智子：子どもと自然・命のつながりを知る保育実践のあり方を探る - 6 - ～環境教育の視点からみる子どもの育ちへ -，大阪大谷大学幼児教育実践研究センター紀要，6，pp.91-125, 2016.
- 7) 大仲美智子・笹井邦恵・尾尻民・森川靖子・岡本なつき・井上美智子：子どもと自然・命のつながりを知る保育実践のあり方を探る - 7 - ～環境教育の視点から自然との関わりを深めるへ -，大阪大谷大学幼児教育実践研究センター紀要，7，pp.75-101, 2017.
- 8) 大仲美智子・笹井邦恵・東直実・矢越里花・井上美智子：子どもと自然・命のつながりを知る保育実践のあり方を探る - 8 - ～自然とのつながりを深めるへ -，大阪大谷大学幼児教育実践研究センター紀要，8，pp.61-90, 2018.
- 9) 内閣府・文部科学省・厚生労働省：幼保連携型認定こども園教育・保育要領，フレーベル館，2017.
- 10) 井上美智子・無藤隆・神田浩行：むすんでみよう 子どもと自然，北大路書房，2010.
- 11) 井上美智子：幼児期からの環境教育 - 持続可能な社会にむけて環境観を育てる，昭和堂，2012.
- 12) 新穂千賀子・中居裕美・村上諒・松村和典：姫路城のマツのこも巻き調査，日本応用動物昆虫学会大会講演要旨，51，p.54, 2007.